巻頭エッセイ

覚え書きから物語へ
――Nonfiction to Fiction

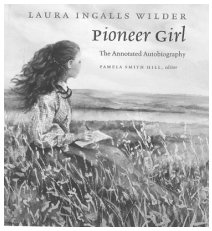
谷口由美子

『大草原の小さな家』といえば，かなりの人が，おてんばで明るい少女ローラの姿を思い浮かべるのではないだろうか。だが，そのローラが実在の人物であり，『大草原の小さな家』を書いた作家であり，さらにその物語は彼女の自伝的な物語であることまでは意外に知られていないかもしれない。

2014年11月，アメリカの小さな地方学術出版社から，ある１冊の本が出され，それはまたたく間にニューヨークタイムズのベストセラーとなった。その本の著者はローラ・インガルス・ワイルダー。没後57年もたって，初めて出版された本である。

ローラが書いた物語は『大草原の小さな家』など10冊の「小さな家シリーズ」と呼ばれるもので，アメリカ児童文学の古典と目されるすばらしい作品だが，今回新たに出版されたのは，ローラがそのシリーズを書く前に書き記した覚え書き“Pioneer Girl”に，ローラ研究家のパメラ・スミス・ヒルが詳しい解説・注釈を加えた大著 *Pioneer Girl : The Annotated Autobiography* である。

このほど幸運なことに，大修館書店からその訳書を出すことになった。表紙絵には，湖のほとりで髪を風になびらせている，かわいいローラが描かれているので，絵本のように見えるかもしれないが，本を開けば，ローラの覚え書きに詳しい注がつき，写真やイラストが入った，ローラ・ファンが初めて味わう物語世界が広がっているのだ。



原著のカバー

では，それほど貴重な覚え書きがなぜ今になって初めて出されたのだろうか？　この本の解説・注釈者パメラ・スミス・ヒルの言葉を借りて説明しよう。「この覚え書きは，子どもが大人へと成長するさまや経験を，大人の視点から語った，大人のための年代記だったが，ワイルダー（ローラ）はそれを子どものためのフィクションとして再創造したのである……娘レインは，ワイルダーを子どものための物語作家として育て上げ，この覚え書きの中に，子どもたちが好み，おもしろがる話が盛り込まれているのを見抜いた。それが作家レインの功績であり，母への贈り物だった」

母ワイルダーと娘レインは，覚え書きを下敷きにし，協力して「小さな家シリーズ」を創りあげた。その過程がつぶさに説明されていることも，本書の大きな特色だ。注釈者ヒルはいう。「この覚え書きを本としてこのたび出版するのは，ワイルダーの創造力がいかに進化したかが，刮目に値するものだからである」

覚え書きで，五歳のローラは，姉メアリに，自分の金髪のほうが，茶色のローラの髪よりきれいだといわれ，腹が立って思わずメアリの顔をたたいてしまった。父にそれをとがめられ，ローラはしくしく泣くのだが，物語の父はローラをやさしく抱きかかえ，いった。「とうさんの毛は茶色だよ」この結末は fiction である。ワイルダーが作家としてこのエピソードにこのようなすてきな結末を与える自由を得たのは，物語が nonfiction ではなく，fiction だからなのだ。

今年2017年は，ローラの生誕150周年。本書を多くのローラ・ファンに知っていただくための講演会はもとより，来年2018年２月～３月に銀座・教文館のナルニア国で開催される「『大草原のローラ物語：Pioneer Girl』の世界」展を皮切りに，ローラ生誕150周年記念展が各地で開かれる予定である。ご期待いただきたい。

（たにぐち　ゆみこ・翻訳家）